

題目設定の理由

文部科学省は、平成13年3月に『21世紀の特殊教育の在り方について～一人一人のニーズに応じた特別な支援の在り方について～（最終報告）』を、また平成14年3月には『今後の特別支援教育の在り方について』を報告し、「障害の程度等に応じて特別の場で指導を行う『特殊教育』から、障害のある児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じて適切な教育的支援を行う『特別支援教育』への転換を図ること」との考え方を打ち出した。そしてそれに対応して、通級指導教室も平成5年に制度化された。

このような近年、我々は障害児教育に力を入れれば入れる程、通級指導教室の必要性を感じていくことになると考える。それは文部科学省が、現在一学校に一学級「特別支援学級」（障害児学級と通級指導教室を同時にかねたもの）を設置するといった考えを打ち出しているほどである。

本論文では、通級児の中でも、近年騒がれているADHD等の軽度発達障害児ではなく、言語障害通級指導教室に通う「吃音児」に焦点を当てたいと考える。吃音という障害は何百年と歴史があり、また吃音で悩む子どもの数も実際少なくはない。人口の約1パーセントを吃音者は占めているといわれている。この割合を見ても、吃音児への支援は障害児教育の中でも大切な取り組みであることが分かる。

そこで、このような近年注目をあびている通級指導教室がどのような取り組みを行っている機関であるのかを知ることと同時に、障害児の中でも吃音児がどのような支援を施され、どのような支援を必要としているのかを探っていきたいと考え、本題目を設定した。

論文構成

はじめに

第一章 通級指導教室の概要

- 第一節 通級による指導に関する法令上の規定について
- 第二節 通級指導教室の教育課程について
- 第三節 通級指導教室の役割について
- 第四節 通級による指導を受ける児童生徒数の推移について
- 第五節 岡山県における通級指導教室の実態について

第二章 吃音とは

- 第一節 吃音症状とその吃音症状の進展について
- 第二節 吃音の原因について
- 第三節 吃音者自身の意識や行動と吃音症状の関係について

第三章 通級指導教室における実践について

～石井小学校ことばの教室（言語障害通級指導教室から）の実践から～

- 第一節 石井小学校ことばの教室の吃音児に対する指導の実態について
- 第二節 石井小学校ことばの教室における吃音児に対する指導の実践からの考察

おわりに

付録 石井小学校ことばの教室の吃音児に対する指導の実態について

論文内容

第一章 本章は、通級指導教室の概要をまとめる。通級による指導において通級児は、特別の教育課程の編成や特別の指導内容等が配慮され、通級による指導の授業時数が認められている。また、通級指導教室が制度化されたのは、軽度発達障害を抱える子どもが増えてきた為であるといわれていることを踏まえ、通級による指導を受ける児童生徒数の推移についても明記し、また、岡山県における通級指導教室の実態について（通級児の実態等）に関しても調べることにした。そして同時に、このような通級指導教室が担う大きく分けての三つ支援、「子どもへの支援」、「保護者への支援」、「学級担任への支援」についての詳細にも触れる。

第二章 本章は、吃音（発達性吃音）という障害についての概略をまとめる。吃音の症状は、軽い連発や伸発から始まるが、症状が悪化するに従って吃音児本人が吃音を意識し始め、結果吃音の症状が難発状態に進展するようになる。そうすると発語に際しての緊張が生まれ、それが表情や身体にあらわれ始め、同時に首を振る、手を振る等の、体を動かす随伴運動も生じるようになる。そして心理面では欲求不満が起こり始め、吃るのではないかという予期不安が起こってくると、話すことを避ける回避行動もあらわれ、コミュニケーションの大きな障害へとつながっていく恐れが生じる。そしてまた、この大きくなった不安や恐れのため、吃らずに話そうとすればするほど、逆に吃ってしまうという悪循環に陥る。

吃音の原因は大きく分けて、素因説（本人の身体や遺伝的要因）、神経症説（本人の心理的不安や葛藤、自我の強さ）、学習説（周囲からの与えられた刺激に対する反応として身に付くもの）があるが、どの説も不確定で、原因ははっきりとされていない。またどうすれば治癒できるのかも分かっていない。しかし、どうすれば吃音の症状を軽減させていけるのか、といったことについては徐々に専門家から打ち出されてきている。チャールズ・ヴァン・ライパーの吃音方程式やウェンデル・ジョンソンの言語関係図からもわかるように、吃音の症状を、吃音者の心理面から改善させていこうとする考え方である。

第三章 第二章で記した「吃音児の心理面から吃音の改善を行う」ことを臨床的に実践している石井小学校ことばの教室の実践を通して、通級指導教室の中身を見ていくことにする。2004年の12月に、集団指導二回と個別指導一回の計三回の指導観察と、その指導等に関するインタビューをことばの教室の教師：青山新吾先生に伺い、その一連の活動によって見えてきた「子ども（吃音児）への支援」に関してこの章では述べることにする。

観察した指導や、またインタビューの内容から、「吃音児の実態」「吃音児に対する指導の目標」「吃音児に対する指導の実態」と項目を三点挙げ、分析を行った。さらに、指導の中でもことばの教室の教師が一番気を使わなければならない「吃音に関する話題に際しての配慮」という項目も特別に設けて、平行してこの分析も行うことにした。

吃音児の指導において、ことばの教室の教師は「吃音の症状」に目を向けるのではなく、「吃音の症状を抱える子ども」自身に目を向ける。そして、その子自身が、吃っていても、生き生きと自分らしく生活していけることを願い支援を行う。子どもは「吃音」という障害に苦しむのではなく、「この時吃ってこうなって困った」等の、子どもの生活の中における問題において悩んでいる。そこで、ことばの教室では、子どもの生活の一部を共に共有したり話をしたりすることで、子どもが吃るから出来なかった、話せなかった、自信がなかった等の問題を共に解決していくようにする。「吃音を直す」という立場に立つのではなく、「吃音を持つ子どもを教育していく」という観点に立って石井小学校ことばの教室は指導を行っている。

観察内で見た対象児は、生き生きとおしゃべりをしていて、また「吃音の症状」と向き合い、「吃音の症状から引き起こされる問題」の対処法などについても、自分なりに持てている様子が、「吃音に関する話題」の中の「30数えたら声が出るようになるよ」等の子どもの発言からもうかがうことが出来る。吃音の症状の辛さがわかる吃音の症状を持つもの同士、またさらにその障害を専門にしている教師によって構成されたこのような環境に吃音を抱える子ども達がおかれているということは、吃音の症状を持つ子ども達にとって、大いに心強いものになっているといえるだろう。

今後の課題

今後小学校現場に出た際に、学級担任として自分は吃音児に何が出来るのかということを実践的に考え取り組んでいきたい。学級担任として、専門機関と連携を持っていくと同時に、吃っていても、クラスの中で堂々と自己表現が出来、集団の中で認められるという経験、また居場所があるという安心感を吃音児に与えられるというのは、普通学級でしか担うことが出来ない役割であるからである。自分の思いや考えを自分の言葉で表現することが出来るクラスを、私は目指していきたいと考える。

主要参考文献

- ・ 『特殊学級及び通級指導教室 教育課程編成の手引き』 長崎県教育委員会 平成15年度
- ・ 研究紀要第二五四号 『特別支援教育における教育相談の推進に関する研究 -一人一人のニーズに応じた相談・支援のために-』 平成16年2月 岡山県教育センター
- ・ 『吃音と上手につきあうための吃音相談室』 伊藤伸治 芳賀書店 1999年